

瓦経の復原とその考察

網 干 善 教

はじめに

ここ数年来、仏教考古学の視点として、瓦経破片の復原研究を行ってきた⁽¹⁾。本稿は各地の個人が所蔵される瓦経について、その復原を行い、併せてそれらの瓦経が他の瓦経とどのような関係にあるかについて考えようとするものである。

瓦経は方形の粘土板に経典を書写し、それを焼成し、埋納されたいわば写経の一種であり、仏教徒の作善業であるといえる。こうした瓦経の製作は現在知られる、瓦経の紀年銘による限り、延久三年（一〇七一）在銘の鳥取県伯耆大日寺瓦経から、承安四年（一一七四）、三重県伊勢市且過山瓦経にいたるまでの約百年間に行われたものであり、瓦経の出土遺跡は西日本を主にして約三十ヶ所がある。

ところが、瓦経片の出土は、その大半が破片であり、しかも、かなり以前から採集され、各国立博物館をはじめ、その他博物館、大学、個人等で若干片を所蔵される場合が多く、復原は十分でない。こうした現状をみるにつけ、これを復原し、考察しようと試みているが、本稿は静岡市在住の服部和彦氏所蔵の三点（以下服部氏蔵瓦経という）、また雑誌『東方界』に求められるままに書いた⁽²⁾「作善業」と題する文章を読まれた愛知県安城市野寺町、本澄寺、小山正文氏より一点（以下小山氏蔵瓦経という）、同氏の紹介により同県碧南市鷺林町在住の水野孝文氏より二点（以下

水野氏蔵瓦経という)、また水野氏の紹介により高浜市高浜町王江在住の神谷儀八氏(以下神谷氏蔵瓦経)の四点、計十点について、書写された経文を經典別にまとめ、復原の成果と他の瓦経との関連について考察する。

一、『大楽金剛不空真実三摩耶経』書写の瓦経

① 大楽金剛不空真実三摩耶経

服部氏蔵瓦経のなかに次のような文字をのこす破片がある。表面に

「大楽金剛……

「般若波羅……

「大 大……

「如是我……

「金剛加……

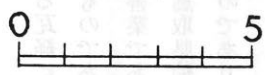
「冠為三……

また、裏面に

「句是菩薩……

「清浄句是……

「楽清浄句……



第1図 服部氏蔵『理趣経』(上=表, 下=裏)

「清淨句是……」

「淨句是苦……」

「般若波羅……」

とある。また、裏面の左縁に

「理趣 一」

とある。この破片は『大正新脩大藏經』（以下『大正大藏經』と略す）に「開府儀同三司特進鴻臚卿肅国公食邑三千戸賜紫贈司空諡大正監号大広智大興善寺三藏沙門不空奉 詔訳」とある『大楽金剛不空真実三麼耶經』すなわち『理趣經』⁽³⁾の冒頭の部分である。瓦経片の文字により復原すると次のようになる。（瓦経にみられる文字はゴチック）

〔表〕 大楽金剛不空真実三麼耶經

般若波羅蜜多理趣品

大 (天カ) 大

如是我聞一時薄伽梵成就殊勝一切如来

金剛加持三麼耶智已得一切如来灌頂宝

冠為三界主已証一切如来一切智智瑜伽

自在能作一切如来一切印平等種種事業

於無尽無余一切衆生界一切意願作業皆

悉円満常恒三世一切時身語意業金剛大

毘盧遮那如来在於欲界他化自在天王宮

中一切如来常所遊処吉祥称歎大摩尼殿

〔裏〕

種種間錯鈴鐸繒幡微風搖擊珠鬘瓔珞半

満月等而為莊嚴与八十俱胝菩薩衆俱所

謂金剛手菩薩摩訶薩觀自在菩薩摩訶薩

虚空藏菩薩摩訶薩金剛拳菩薩摩訶薩文

殊師利菩薩摩訶薩纒纒心転法輪菩薩摩

訶薩虚空庫菩薩摩訶薩摧一切魔菩薩摩

訶薩与如是等大菩薩衆恭敬围绕而為説

法初中後善文義巧妙純一円満清淨潔白

説一切法清淨句門所謂妙適清淨句是菩

薩位欲箭清淨句是菩薩位触清淨句是菩

薩位愛縛清淨句是菩薩位一切自在主清

淨句是菩薩位見清淨句是菩薩位適悅清

淨句是菩薩位愛清淨句是菩薩位慢清淨

句是菩薩位莊嚴清淨句是菩薩位意澁

清淨句是菩薩位光明清淨句是菩薩位身

案清淨句是菩薩位色清淨句是菩薩位聲

清淨句是菩薩位香清淨句是菩薩位味清

淨句是菩薩位何以故一切法自性清淨故

般若波羅蜜多清淨金剛手若有聞此清淨

以上のように同定の結果、次のようなことが判明する。

第一に瓦経表面をみると、一行目に「大衆金剛不空眞実三麼耶経」と經典の題目を書写している。また二行目は「般若波羅蜜多理趣品」と品題を書写する。三行目は「大」があり、ついで二字分空白で、四字目に「大」または「天」と読める文字がある。第四行目から経文がはじまるのでこの間、どのようなことを書写したのであるうか。考えられることは經典の訳者名であろう。

さすれば「大□□大(天)」は

大・大智大・興善寺三藏沙門不空奉詔記

となるのではなからうか。それにしても「大智」にあたる二字が空白であるのは何故だろうかという疑問はこのころ。

第二に左縁に「理趣 一」とあるのは『理趣経』の一枚目に相当するということである。そこでこれをみると、瓦経は表面四行目から書写がはじまり、一行十七字詰、表裏共に十五行、計三十行の書写であることが判明する。判読する限り、この原則によって正確に書写されていることがわかる。

次にこの瓦経片の原形を復原すると、縦については裏面の「句是菩薩」「般若波羅」の四字が五・二ツであり、これを十七字とし、上端縁幅が一・四ツであるから、下端もこれと同じと推定して計算すると約二〇・五ツとなる。

これに対して横幅は、一行が一・八ツ、で十五行、裏面の左縁幅が一・七ツであるから、約三〇・四ツと推計できる。この大きさは十五行瓦経としては最も普通に見られるものである。なお、厚さは一・八ツ、上面及び表面右端を

みると面取がみられる。色調は灰色で焼成度のよい遺物といえる。

② 大乗金剛不空真実三摩耶經

小山氏蔵瓦経一点に、これと同じ『理趣経』書写の破片がある。表面に

「若理趣……………」

「无相与无……………」

「相応故諸……………」

「文殊師利……………」

「以自□……………」

とあり、裏面に

「多最勝……………」

「……………」

「時薄伽……………」

「輪般若……………」

「来法輪……………」

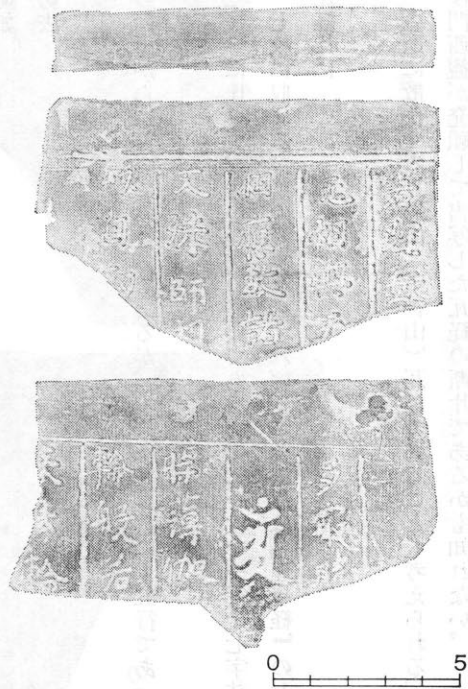
とある。これを『大正大藏経』に同定すれば次の如くなる。

〔表〕 時薄伽梵一切無戲論如来復説転字輪般

若理趣所謂諸法空与無自性相応故諸法

無想與無相性相応故諸法無願与無願性

相応故諸法光明般若波羅蜜多清浄故時



第2図

文殊師利童真欲重顯明此義故熙怡微笑
以自劍揮斫一切如來已說此般若波羅蜜

〔裏〕 多最勝心

菴（裏）

時薄伽梵一切如來入大輪如來復説入大

輪般若理趣所謂入金剛平等則入一切如

來法輪入義平等則入大菩薩輪入一切法

平等則入妙法輪入一切業平等則入一切

いまここで確実に復原できるのは改行の箇所からはじめて六行分であるが、本来は表裏共に十五行であったと予想できる。

『理趣經』は、『法華三經』や『秘密三經』に比べて、短い經文の經典である。仮に一枚を一行十七字詰、表裏各十五行の通有の形式で書写するとすれば、七枚に収まる。この計算からすれば、この破片は『理趣經』の七枚中の四枚目に相当することになる。また、この瓦経片に

「大正元年 宇治山田市天神山」

との朱書がある。とすれば、この破片は、各所に散佚する且過山（天神山）瓦経であることも考えられる。これは承安四年 伊勢国の度会氏が檀越となり、沙門西観が発願して書写した瓦経の断片であるかも知れない。

次にこの瓦経片から大きさを復原すると次のようになる。

表面三行目の「相應故諸」の四字が四・八マこれを十七字とし、上下端一・六マを加えると、縦の推計二三・六マ、横は一行が一・九マで十五行、表面左側縁幅〇・九五マであるから三〇・四マとなる。厚さは一・七五マである。通

しい。

第三にこの瓦経と接続する瓦経が関西大学所蔵の瓦経片にある。これについては今後の観察と検討に俟ちたい。次に原形の大きさであるが、表面二行目の「南摩三曼多勃駄」の七字が八・一ツであり、これを十七字とし、上端縁が一・六ツであるから、縦の復原は約二二・九ツ、横は一行が一・八ツで十五行、左右縁一・二ツであるから、約二九・四ツと計算することができる。厚さは一・八ツである。

三、『蘇悉地羯羅經』書写の瓦経

④ 蘇悉地羯羅經 (別本二) 上卷 持真言法品第六

「神谷氏蔵瓦経」の中に『蘇悉地羯羅經』書写の破片が二点ある。うち一点の表面に

………**詰**………
 ……**議行**………
 ……**與彼別持**………
 ……**之法**………
 とあり、裏面に

………**葱蒜蘿**………
 ……**餅并**………



第4図 神谷氏蔵『蘇悉地羯羅經』(上=表, 下=裏)

と判読できる文字がある。残存文字は僅かであるが、『大正大藏經』所輯「唐天竺三藏輸波迦羅訳」の『蘇悉地羯羅

經』卷上（別本二）「持真言法品第六」の經文である。⁽⁶⁾以下、残存の文字によって復原すると次の如くなる。

〔表〕 若樂成就真言法者應順依制不應詰難大

〔裏〕 惡口罵詈皆不應作所應對答不佞多言無

乘正義若聞菩薩甚深希有不思議行心生

益言談終不習学亦復不与外道之人及旃

諦信不懷疑心持真言人不應与彼別持誦

茶羅人同住如斯等類來相問詰亦不与語

人更相施驗若緣小過不應即作降伏之法

亦不与外諸人談話唯共伴語当念誦時縱

樂成就人不應歌詠言詞調戲為嚴身好不

是同伴亦不与語唯除余時自非所須不与

応塗飾脂粉花鬘亦不跳躑急走邪行亦不

伴語亦不以油塗飾於身又不應喫葱蒜蘿

河中裸形浮戲略而言之身諸嘲調一切戲

煎油麻酒酢及余一切諸菜茹米粉豆餅并

喫諸邪口業及虚誑語諂汚心語離間和合

蒸羶豆及油麻餅并作团食皆不應喫一切

この瓦経片は残存文字によって、経文をみる限り、一行十七字詰、表裏共に十五行、計三十行の通例の原則によつて書写されているといえる。

次に原形の推計であるが、表面三行目の「与彼別持誦」の五字が六・二マ、下端が一・五マであるから約二四・一マとなる。これに対して横幅は一行が一・八マで十五行であるから二七マ、これに上下端縁を加えるとほぼ三〇マ前後となる。この数字は通例に近い。厚さは一・九マである。

⑤ 蘇悉地羯羅經（別本二）卷下 灌頂壇品第三十三

神谷氏所蔵瓦経片の他の一片には次のような文字がある。表面の右野外に

………於台漫茶羅東面角所安置

とあり

………利随彼所樂而当奉献………

..... 護摩已前之安瓶隨所.....

..... 加被之於本尊前所安.....

..... 之其台内瓶應用明.....

..... 為軍荼利所安置瓶.....

..... 心真言東南.....

..... 弁諸事真.....

..... 此上瓶已.....

..... 法此亦如.....

とあり、裏面に

..... 観.....

..... (空行).....

..... 品第卅四.....

..... 已応作護摩.....

..... 或隨其成就.....

..... 用蘇蜜酪和以.....

..... 祀乳粥或祀酪飯.....

..... 香薰之以香水灑以真.....

..... 以吉祥環貫置指上榻按.....

..... 或白芥子灑散物上及於節.....

瓦経の復原とその考察



第5図 神谷氏藏『蘇悉地羯羅經』(上=表, 下=裏)

とある。また裏面左縁に

「蘇三卷二十九」

という丁付がみられる。

この瓦経は前同様『蘇悉地羯羅經』の(別本二)卷下「灌頂壇品第三十三」から「光物品第三十四」にかけての書写の部分である。⁽⁷⁾なお、重要なことは、この瓦経に続く次の瓦経の断片が、関西大学考古学資料のなかにある。⁽⁸⁾両者共に破片であるが、全体を復原すると経文が完全につながるということである。

そこでこの二片を復原すると次のようになる。

〔表〕 置句吒鬻利随彼所案而当奉献如法供養

諸真言已及護摩已前之安瓶随所為者誦

彼真言而用加被之於本尊前所安之瓶還用

彼真言而加被之其台内瓶応用明王真言

而作加被当門為軍荼利所安置瓶亦須用

彼真言加被於台漫茶羅東面兩角所安置

瓶東北角者以部心真言東南角者用部母

真言西北角者用能弁諸事真言西南角者用

一切真言如是加被此上瓶已及供養已次

応右邊如前說灌頂法此亦如是安置吉祥

瓶所謂穀実菓草花果香樹枝葉花鬘及宝

置於瓶内新帛繪綵用纏其頸諸灌頂法皆

応如是即令同伴灌行者頂其同伴者皆須

持誦如法清淨或求阿闍梨配与灌頂為欲

除遣諸作障故先用軍荼利瓶而用灌頂第

四応用所持真言瓶而用灌頂其余二瓶隨

意而用如是畢已応以牛黄塗香薰香芥子

線釧衣服皆応受用作灌頂已復為息諸障

故応作護摩已便即発遣或於淨処但一彩

色作小漫茶羅極令方正其量二肘安置三

部大印西面契印如前安置淨瓶如法灌頂

能離諸障本尊 觀喜不久速成此

秘密最勝悉地

蘇悉地羯羅經光物品第卅四

復次如法灌頂畢已応作護摩經三七日或
一七日或經一月或隨其成就相応或於本
法所説毎日三時用蘇蜜酪和以胡麻応作
護摩或依本法祀乳粥或祀酪飯所成就物

関西大藏

〔表〕 供具奉獻彼物若白月成者取十五日若黒
月成者取十四日如斯作法光顯其物皆用
部母真言復重加諸花香花鬘等物供養以
香塗手置茅草環按所成物畢夜持誦於夜
三時誦百八遍如斯光顯成就之物從始至
終皆応如是若具此法速得成就

仏部光顯真言曰

唵同上諦惹塞増乙反尾爾乙悉睨娑去馱野三反虎

二併柿合

蓮華部光顯真言曰

唵同上抱奴立比并巳抱同上比同上上備跛野三摩訶室

利曳三莎嚩去合二訶四

金剛部光顯真言曰

唵同上入嚩囉入囉野三畔度哩三莎嚩去合一

毎日三時以香薰之以香水灑以真言加被
觀視其物以吉祥環貫置指上榻按其物以
牛黃水或白芥子灑散物上及於節日加諸

訶四

〔裏〕

於三部法皆用赤羯囉微嚩花以真言持誦
散灑其物或用忙落底花或用白芥子首末
中間皆応如是散霑其物或有驚界及見異
相亦如是散臨欲成就亦如是散便成光顯
若欲成就蘇等之物真言香水用灑其物便
成光顯以如是法而光顯物縱不成者不応
間断或作漫茶羅以為光顯如前淨地用五

種色作漫茶羅其量四肘而開一門内院東
面先置輪印東北角置鉢印東南角置袈裟
印次於北面置蓮華印於西北角置灘拏椀
印於東北角置軍持瓶印次於南面置技折
羅印於東南角置藥那椀印於西南角置羯
囉除瓶印於西面置金剛鉤印金剛拳印於

西南角置計利吉羅印於西北角置遜婆印

復於東面置輪右辺置仏眼部母印又於北

とところで神谷氏藏瓦経について問題をあげておく。

第一に、表面右縁野外に

……………於台漫荼羅東面兩角所安置

とある。これは次の理由によるものであることが判明した。すなわち復原した瓦経をみると表面六行目の

彼真言加被於台漫荼羅東面兩角所安置

の一行十七字が欠行となっている。恐らく書写中にこの一行が書きもらされたと考えてよい。ある程度書写が行われた（この一枚の書写の完成後であるかも知れない）ときに、この一行が欠脱していることに気付いたため、この一行を表面の欄外に追記したということになる。

第二に、瓦経の七行目に「……弁諸事真……」とあるが、『大正大藏経』では「……弁諸真……」となり「事」の文字がない。この瓦経の写経者は「事」を一字余分に書いたことになる。ところが次の行は十七字となり、文字の位置も七行目と合致するから、恐らく七行目は十八字詰となっていたであろう。

第三に、瓦経の裏面一行目に「觀」らしき文字がある。これは復原の六行目にみる「觀」に相当する。それは問題はないのであるが、文字の位置を瓦経四行目（復原の九行目）と対比すると「護」に対応する位置になる。この「護」は十一字目に相当するから、これを瓦経一行目（六行目）にあてると四字文の空白ができることになる。これは次の行が第三十三品の終りであるため、改行して以下空白となっているため、この間の事情は明確でない。このことは表面九行目以下裏面五行目までの間に四字分だけ、どこかで行送りとなったと推察できる。

第四に、裏面の八行目に「……品第卅四」とある。すなわち裏面七行目までは第三十三の灌頂壇品であり、この行から第三十四の光物品となる。これについて「三藏輪波迦羅記」の『蘇悉地羯羅經』では、「光頭諸物品第三十二」

であり、「別本一」では「光物品第三十二」であるから「品卅四」とみえるのは「別本二」のみであるから、確実に「別本二」の書写であることがわかる。

第五に、関西大学蔵瓦経との関連である。神谷氏蔵瓦経の欠損部を復原し、併せて関西大学蔵瓦経の復原をすると、この二枚は前後に接続することが判明した。この成果は筆者の瓦経片復原の一つの目的としたところである。

すなわち両者共に破片であって、一枚の瓦経の一部である。したがって直接には破損部は連がらない。ところが先の全文を復原することによって、それが本来続いていたものであることが判明する。このような例は国学院大学蔵

瓦経片（『蘇悉地羯羅経』別本二、「護摩品第二十七」）から「備物品第二十八」⁽⁹⁾と八尾市辻合喜代太郎氏蔵（大阪市立博物館寄託）の瓦経片が同様前後関係にあることがわかった。こうした成果は、今後も生じるであろう。

第六に、裏面左縁に「蘇三卷廿九」という丁付がある。これは「別本二」による『蘇悉地羯羅経』の「卷下」の第二十九枚目に相当する。したがって「三卷」とは「卷下」のことである。

次に、この瓦経の大きさの復原は次のように考えることができる。

縦については表面一行目の「利随彼所樂而当奉献」の九文字が十一・三マであるから二一・三マとなり、上下端の縁幅を加えると約二四マ、横は一行の幅に若干広狭があるので表面九行が十六・二マであるから、十五行とすると二七マ、それに左右縁幅各一・五マを加えると約三〇マと復原できる。厚さは一・七マである。

四、『妙法蓮華法』書写の瓦経

瓦経に書写された所例の多い経典に『妙法蓮華経』がある。以下服部、神谷、水野氏所蔵の瓦経片について『大正大藏経』に同定、復原し、考察を試みる。

⑨ 妙法蓮華経巻第四 見宝塔品第

先ず服部氏蔵瓦経のなかに、片面の文字が

「観仏□□……………」

「塔戸出大音……………」

「切衆会□□……………」

「全身不散如……………」

「迦牟尼仏□□……………」

とある。ところが反対側は磨滅がひどく文字が読みとれない。したがって、表裏及び全体を復原することはできないが、今、片面だけを同定すると次の如くなる。

一心観仏於是釈迦牟尼仏以右指開七宝

塔戸出大音声如却闕鑰開大城門即時一

切衆会皆見多宝如来於宝塔中坐師子座

全身不散如入禪定又聞其言善哉善哉釈

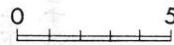
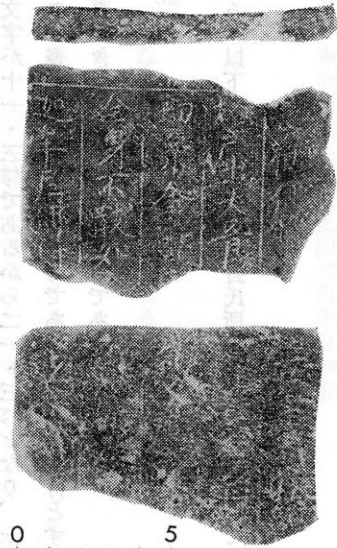
迦牟尼仏快説是法華経我為聽是経故而

これは『妙法蓮華経』巻第四「見宝塔品」の経文である。⁽⁶⁾これについて「国学院大学所蔵」に、この瓦経の前にあたる破片がある。今両者の連接部分の關係を示せば次の如くである。

悉安隱不以此宝華散仏供養而作是言彼

某甲仏与欲開此宝塔諸仏遣使亦復如是

○爾時釈迦牟尼仏見所分身仏悉已來集



第6図 服部氏蔵『妙法蓮華経』
(上=表, 下=裏)

国学院蔵

〔裏〕

→ 各各坐於師子之座皆聞諸仏与欲同開宝
塔即從座起住虛空中一切四衆起立合掌

服部氏蔵

〔裏〕

← 一心観仏於是釈迦牟尼仏以右指開七宝
塔戸出大音声如却闕鑰開大城門即時一（以下略）

国学院大学蔵瓦経は十七字詰、表裏共に十五行の形式である。ただ出土地や筆者は異なるかも知れない。

なおこの服部氏蔵の瓦経は一行目の「塔戸出大音」の五字が五・六マ、上端縁幅が○・六マであるから縦約二〇・二マ、横は一行が一・九マであるから十五行とすると二八・五マ、左右両縁幅若干をかえると約三二マ程度となる。厚さ一・三マで、薄手の形式である。

⑦ 妙法蓮華経卷六 随喜功德品第十六

服部氏蔵瓦経ではほぼ完形であるが、一部欠損と文字の不鮮明な箇所があるので次の如く同定した。⁽⁴⁾

〔表〕

譬喻所不能知阿逸多如是第五十人展転

〔裏〕

可共往聴即受其教乃至須臾聞是人功

聞法華経随喜功德尚無量無辺阿僧祇何

徳転身得与陀羅尼菩薩共生一処利根智

況最初於会中聞而随喜者其福復勝無量

慧百千万世終不瘡痂口氣不臭舌常無病

無辺阿僧祇不可得比又阿逸多若人為

口亦無病齒不垢黒不黄不踈亦不欠落不

是経故往詣僧坊若坐若立須臾聴受縁是功

差不曲唇不下垂亦不蹇縮不龜洩不瘡疹

徳転身所生得好上妙象馬車乘珍宝鞞輿

亦不欠壞亦不喎斜不厚不大亦不黧黒無

及乘天宮若復有人於講法処坐更有人來

諸可惡鼻不偏匡亦不曲戾面色不黒亦不

勸令坐聴若分座令坐是人功德転身得帝

狭長亦不窟曲無有一切不可喜相唇舌牙

釈坐処若梵王坐処若転輪聖王所坐之

齒悉皆嚴好鼻修高直面貌円満眉高而長

処阿逸多若復有人語余人言有経名法華

額広平正人相具足世世所生見仏聞法信

服部氏藏『妙法蓮華經』

服部氏藏『妙法蓮華經』

服部氏藏『妙法蓮華經』

服部氏藏『妙法蓮華經』

服部氏藏『妙法蓮華經』

服部氏藏『妙法蓮華經』

服部氏藏『妙法蓮華經』

服部氏藏『妙法蓮華經』

服部氏藏『妙法蓮華經』

服部氏藏『妙法蓮華經』

服部氏藏『妙法蓮華經』

服部氏藏『妙法蓮華經』

服部氏藏『妙法蓮華經』

服部氏藏『妙法蓮華經』

服部氏藏『妙法蓮華經』

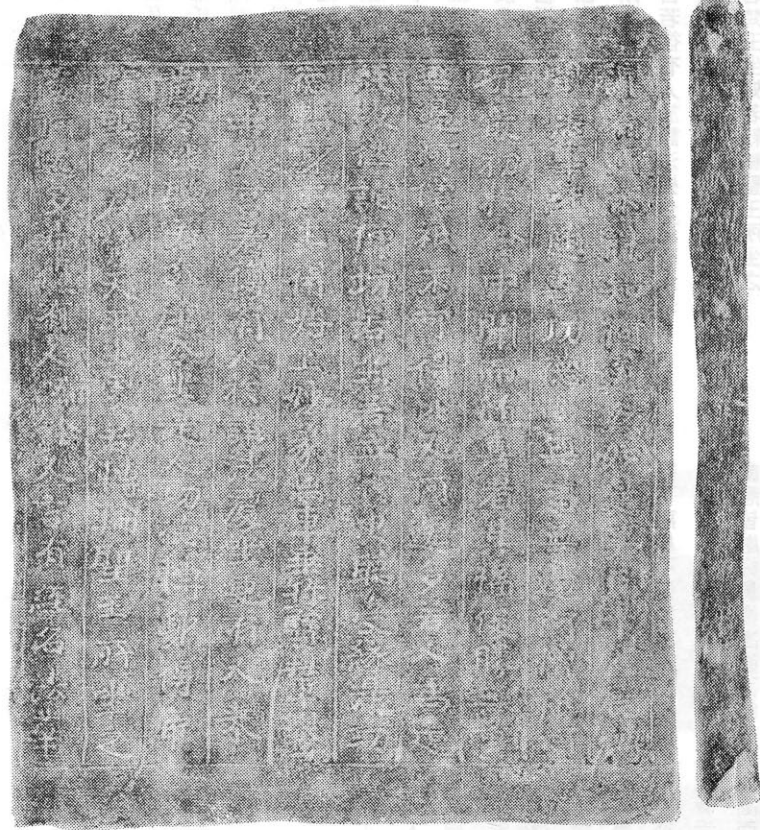
服部氏藏『妙法蓮華經』

服部氏藏『妙法蓮華經』

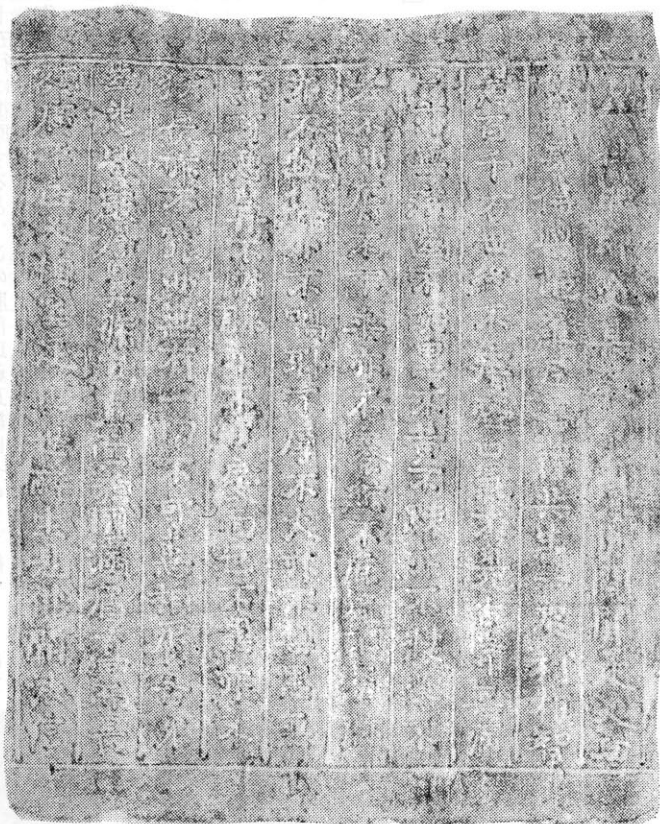
服部氏藏『妙法蓮華經』

服部氏藏『妙法蓮華經』

服部氏藏『妙法蓮華經』



第7図 服部氏藏『妙法蓮華經』(表)



同(裏)

この瓦経は『妙法蓮華經』卷第六「隨喜功德品第十八」である。

第一に、原則として一行十七字詰、表裏共に各十行、計二十行の書写である。

第二に表面四行目が十六字、五行目が十八字となつて、四行目の一字が五行目へ送られている。また表面九行目は

十六字であるが、この場合次の十行目は通常の十七字詰となっている。裏面は各行とも十七字詰で正確に書かれている。

第三にこの瓦経の前の瓦経が関西大学所蔵にある。関西大学の瓦経は今のところ裏面七行までしか確実に復原できないが、これを十五行に復原すると、この服部氏蔵瓦経にそのまま続くことになる。

今その関係を復原して示せば次の如くなる。

関西大学蔵〔表〕 第五十善男子善女人随喜功德我今説之

汝当善聴若四百万億阿僧祇世界六趣四

生衆生卵生胎生湿生化生若有形無形有

想無想非有想非無想無足二足四足多足

如是等在衆生数者有人求福随其所欲娛

楽之具皆给与之一一衆生与満闍浮提金

銀琉璃車乘馬腦珊瑚琥珀諸妙珍宝及象

関西大学蔵〔裏〕 馬車乘七宝所成宮殿樓閣等是大施主如

是布施満八十年已而作是念我已施衆生

娛楽之具随意所欲然此衆生皆已衰老年

過八十髮白面皺将死不久我当以仏法而

訓導之即集此衆生宣布法化示教利喜一

時皆得須陀洹道斯陀含道阿那含道阿羅

漢道尽諸有漏於深禅定皆得自在具八解

脱於汝意云何是大施主所得功德寧為多
 不弥勒白仏言世尊是人功德甚多無量無
 辺若是施主但施衆生一切樂具功德無量
 何況令得阿羅漢果仏告弥勒我今分明語
 汝是人以一切樂具施於四百万億阿僧祇
 世界六趣衆生又令得阿羅漢果所得功德
 不如是第五十人聞法華經一偈隨喜功德
 百分千分百万億分不及其一乃至算數

服部氏藏 [表]

譬喻所不能知阿逸多如是第五十人展轉

聞法華經隨喜功德尚無量無辺阿僧祇何(以下略)

となる。すなわち関西大学蔵表↓裏↓服部氏蔵表↓裏へと一連になる。
 但し同一の場所の出土であるかどうかは明らかでない。

この瓦経は完形である。縦十九・四センチ、上端一・四センチ、下端一・五
 センチ計二二・三センチ幅一行一・七センチで十行、左右両縁を加えて十七・九センチ
 となる。厚さ一・六センチである。

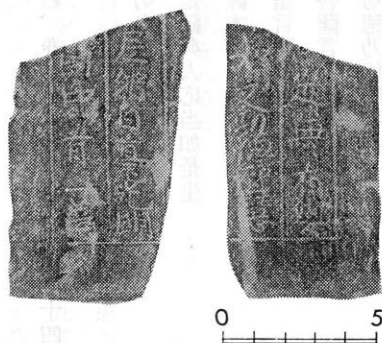
⑧ 妙法蓮華経巻第六 薬王菩薩本事品第二十三・巻第七妙音菩薩品

第二十四

神谷氏蔵瓦経片を観察すると、表面に

.....□定無有与」

.....如是功德智慧」



第8図 神谷氏蔵『妙法蓮華経』
 (右=表, 左=裏)

とあり、裏面に

……………尼仏白毫光明」

……………国中有一善」

とある。これは『妙法蓮華経』巻第六「薬王菩薩本事品第二十三」の終りから、巻第七「妙音菩薩品第二十四」のはじめにかけての経文である。以下次の如く同定することができる。⁽⁵⁾

〔表〕 諸声聞辟支仏乃至菩薩智慧禪定無有与

汝等者夜王華此菩薩成就如是功德智慧

之力若有人聞是薬王菩薩本事品能随喜

讚善者是人現世口中常出青蓮華香身毛

孔中常出牛頭栴檀之香所得功德如上所

説是故宿王華以此薬王菩薩本事品嘱累

於汝我滅度後後五百歲中広宣流布於閻

浮提無令断絶惡魔魔民諸天龍夜叉鳩槃

荼等得其便也宿王華汝当以神通之力守

護是経所以者何此経則為閻浮提人病之

良薬若人有病得聞是経病即消滅不老不

死宿王華汝若見有受持是経者応以青蓮

花盛満末香供散其上散已作是念言此人

不久必当取草坐於道場破諸魔軍当吹法

〔裏〕

螺擊大法鼓度脱一切衆生老病死海是故

求仏道者見有受持是經典人应当如是生

恭敬心説是薬王菩薩本事品時八万四千

菩薩得解一切衆生語言陀羅尼多宝如来

於宝塔中讚宿王華菩薩言善哉善哉宿王

華汝成就不可思議功德乃能問釈迦牟尼

仏如此之事利益無量一切衆生

妙音菩薩品第二十四

爾時釈迦牟尼仏放大人相肉髻光明及放

眉間白毫相光遍照東方百八万億那由他

恒河沙等諸仏世界過是数已有世界名淨

光莊嚴其国有仏号淨華宿王智如来応供

正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈

夫天人師仏世尊為無量無辺菩薩大衆恭

以上のように同定、復原することができる。

第一に、裏面十四行目で瓦経文と続けようとする一字の空白ができる。これはそれまでの間に十八字の行があり、一字づつ繰上ってきたために生じたものか、あるいは「而為說法」と書き、経文の意味から勘案して一字空白をついたのかは明らかでない。

第二に、これと同一の箇所を書写した瓦経に鳥取県大日寺蔵の瓦経がある。ただしこの瓦経と比較すると冒頭で一行と三字の誤差がある。これを示せば次の如くなる。

伯耆大日寺蔵

間天人之中無如汝者唯除如来其諸声聞

辟支仏乃至菩薩智慧禪定無有与汝等者（以下略）

神谷氏所蔵

諸声聞辟支仏乃至菩薩智慧禪定無有与（以下三二頁参照）

第三に、この神谷氏蔵の裏面最終行と、国学院大学蔵の表面第一行目との関係をみると

遍照其國爾時一切淨光莊嚴國中有一菩

の経文が重複することになる。これは全体としてこの瓦経以前にどこかで一行の相違が生じているものと思う。

次に瓦経の原形は裏面の「尼仏白毫光明」の六字が六・八マツであるからこれを十七字とし、下端縁一・九マツを上端と同じと推計すると二三・一マツとなる。幅は裏面一行目が一・九マツ、二行目が一・七マツであるから平均一・八マツとし十五行と両端一・五マツの縁で三〇マツとなる。厚さ一・七マツである。

⑨ 妙法蓮華経卷第七 妙音菩薩品第二十四

次に水野氏所蔵の瓦経の表面に品番二十四

与八万四千菩……………

供養親近礼……………

殊師利□……………

□……………

とあり、裏面に

□……………

宝如来……………

見多宝□……………

牟尼仏語多宝……………

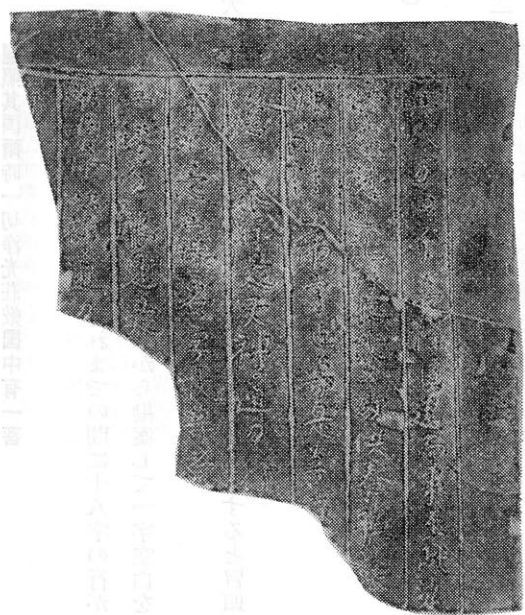
多宝仏告妙音……………

とある。これは『妙法蓮華経』巻第七「妙音菩薩品第二十四」にあたる。ところが次に⑩として挙げる神谷氏所蔵の瓦経が、実はもと⑨の破片と同一個体の瓦経であることが判明した。それは次の如くである。

⑩ 神谷氏所蔵の瓦経は表面に

薩甕繞而來至此娑……………

於我亦欲供養聽法……………



第9図 水野氏蔵『妙法蓮華経』（右=表、左=裏）

願世尊以神通力彼菩薩來令我得見爾時

釈迦牟尼仏告文殊師利此久滅度多宝如

來當為汝等而現其相時多宝仏告彼菩薩

善男子來文殊師利法王子欲見汝身于時

妙音菩薩於彼國没与八万四千菩薩俱共

發來所經諸國六種震動皆悉雨於七宝蓮

華百千天樂不鼓自鳴是菩薩目如大青

蓮華葉正使和合百千万月其面貌端正復

過於此身真金色無量百千功德莊嚴威德

〔裏〕 熾盛光明照耀諸相具足如那羅延堅固之

身入七宝台上昇虚空去地七多羅樹詣菩

薩衆恭敬圍繞而來詣此娑婆世界耆闍崛

山到已下七宝台以偈直百千瓔珞持至釈

迦牟尼仏所頭面礼足奉上瓔珞而白仏言

世尊淨華宿王智仏問訊世尊少病少惱起

居輕利安樂行不四大調和不世事可忍不

衆生易度不無多貪欲瞋恚愚癡嫉妬慳慢

不無不孝父母不敬沙門邪見不善心不攝

五情不世尊衆生能降伏諸魔怨不久滅度

多宝如來在七宝塔中來聽法不又問訊多

宝如來安隱少惱堪忍久住不世尊我今欲

見多宝仏身唯願世尊示我見爾時釈迦

牟尼仏語多宝仏是妙音菩薩欲得相見時

多宝仏告妙音善哉善哉汝能為供養釈

この瓦経について、第一に文字が不揃いであるために正確な改行はわからないが、瓦経の文字を『大正大藏経』に照合すると十七字詰、表裏共十五行におさまる。また、瓦経の文字についてみるに、非常に特徴のある筆跡である。

第二に、裏面復原の十行目、瓦経では「五情不尊」とある。『大正大藏経』では「五情不世尊」となる。すなわち瓦経の方が「世」の一字を脱していることになる。ところが瓦経片を復原してみると「世」を加えて十七字におさまるところからみると、十行目に一行だけ十六字のところができると思う。

次に大きさは表面一行目の「与八万四千菩薩圍繞而來至此」の十三字が十六字であり、上端縁幅一・八字であるから縦約二四・五字、横は平均一・八字、両端縁幅二・一字と一・七字、平均一・九字であるから三〇・八字となる。

厚さは二・一センチでやや厚手の瓦経である。

五、小 結

ここに復原した十点の瓦経は理趣経二点、大日経一点、蘇悉地経二点、妙法蓮華経五点である。

第一に、理趣経の二点は資料としては少ないものである。この経典は梵名 *prajña-paramitā-naya-satpāncasatikā* 西藏名 *śes-rab-kyi-pla-rol-tu-phyin-paṅtiṣṭhul-brgya-lha-bcu-pa* と称され、『大乗金剛不空真実三摩耶経』略して『般若理趣経』あるいは単に『理趣経』ともいい、唐不空の訳で一巻がある。『大正新脩大藏経』では第八卷の「般若部四」に収められた経典である。(他の経典については『奈良県立橿原考古学研究所紀要第四集』に掲載)

また小山氏蔵にみられる「大正元年 宇治山田市天神山」という朱書が正しければ、この瓦経出土地は伊勢市浦口町にある且過山小町塚瓦経である。そうするとこの遺跡にも『理趣経』が納められていたということになる。

第二に、個々の瓦経の問題については各項に記述したが、⑤の神谷氏蔵瓦経のように、出土地は異なるかも知れないが、それに続くものが、全く異った機関や地域で所蔵されていることもある。この場合、神谷氏↓関西大学の例であるが、他にも、国学院大学↓大阪辻合氏蔵(大阪市立博物館寄託)ということも判明し、漸次その復原成果をみるこ
とができるようになった。

また⑥の『妙法蓮華経』のように服部氏蔵と国学院大学、福岡市立歴史資料館蔵と同一箇所の写真のあることや、水野氏蔵と伯耆大日寺蔵も同様な関係であることもわかってきた。恐らくこうした例は今後の復原研究によって判明するであろう。筆者の瓦経片の復原研究は、単に瓦経片の同定だけでなく、こうした瓦経の相互関係や比較研究にあり、一片の瓦経片に資料的価値を見出そうとすることである。

註

- (1) (一) 網干善教 「関西大学考古学資料瓦経片の復原」 (柴田實先生古稀記念『日本文化史論叢』昭和五十一年。
 (二) 同 「国学院大学蔵瓦経片の復原研究」『国学院雑誌』第七八卷九号(通卷八四五号) 昭和五十二年。
 (三) 同 「瓦経片の復原におもう」『日本歴史』第三五六号) 昭和五十三年。
 (四) 同 「関西大学考古学資料瓦経片の復原(その二)」『史泉』第五二号) 昭和五十三年。
 (五) 同 「瓦経片復原研究所例」『仏教史学研究』第二〇卷一号) 昭和五十三年。
 (六) 同 「瓦経の復原」(『考古学ジャーナル』第一五三号一九七八年九月号) 昭和五十三年。
 (2) 網干善教「作善業」(『東方界』第六〇号) 昭和五十三年。
 (3) 高楠順次郎編『大正新脩大藏経』第八卷「般若部四」大正十三年 七八四頁。
 (4) 同書 七八五頁。
 (5) 同書 第十九卷、「密教部一」 昭和三年 十六〜十七頁。
 (6) 同書 六六六頁。
 (7) 同書 六九一頁。
 (8) 註(1)の四参照。
 (9) 註(1)の二参照。
 (10) 実見による。
- (11) 高楠順次郎編『大正新脩大藏経』第九卷「法華部全、華嚴部上」 大正十四年 三三三頁。
 (12) 同書 四六〜四七頁。
 (13) 同書 五四〜五五頁。
 (14) 同書 五五頁。

(付記) 本稿は、昭和五十四年度文部省科学研究費一般研究C「瓦経の復原研究」による成果の一部である。